

健康文化

「銀河鉄道」の切符

高田 健三

夜空にちりばめた宝石のような星の数々には、我々人類は限りないロマンを抱き続けてきた歴史が込められている。ことあれば星に願いをかけ、吉凶を占い、あるいは部族の繁栄を賭けた地を探し求めて、さすらいの旅を続けた遙か有史以前の我々の祖先も、行く先を定める道しるべにもしたことであろう。夜空を眺めて、星はなぜ落ちてこないのかとか、空の向こうには何があるだろうかなど、不思議に思った記憶を持っている人もあるであろう。その宇宙の謎も、コペルニクス、ガリレオやニュートン達の異才が世に出た科学革命期を界にして、次々と明かされてきたが、何といてもハイライトは、1960年代から始まった惑星探査機の活躍であった。テレビや写真で太陽を取り巻く惑星の素顔を見るにつけ、月や、火星など星のイメージは様変わりしてしまった。空に浮かぶまん丸の月に、日本人は兎の餅つきをイメージし、西欧人は横顔を見せる美女に思いを抱き、中国人はガマガエルを見るといった古来からのメルヘンの世界は、今や影が薄くなってしまった。すすきの穂陰に輝く仲秋の明月を眺めているときに、ふと、30年前のアポロ11号のアームストロングとオールドリンが降り立って見たという、あの寒々とした月面の荒野が目を掠めることもある。三百数十年前ガリレオと親交があった天文学の逸材ケプラーは、月世界旅行物語の中で、月から地球はどのように見えるかなど、空想を巡らせたという。その表題は「夢」なのである。100年ほど前のSF作家ジュール・ヴェルヌの月世界旅行は、私たちが子供心を踊らせた夢物語である。岩波「国語辞典」によれば、二つの夢がある。一つは、実現不可能な空想的願望であり、他の一つは、自分が将来に実現させたいという願いである。今の子供の中には、宇宙飛行士になりたいという者もいれば、アメリカなどでは「月世界観光旅行」なる募集もあったという。今日の夢は現実につながる夢であるらしい。

昨秋、流星雨が話題になったとき、子供達のみならず、大勢の人々が天体ショーに興味を持ったというのは、宇宙は人の興味を引きつける神秘性を持っている証拠である。テンペル・タット彗星が残していった彗星物質群と地球軌道が交叉する際に起こる流星雨は、近年にない大規模なものになるという予測が

テレビや新聞で流されると、天文愛好家のみならず、一般の人までも巻き込んだ秋の夜のフィーバーが起こった。二十数年前に、やはり大流星雨の期待がかかって、当時住んでいた岐阜市を流れる長良川の堤防に、小学生だった娘をつれて見に行ったことがあった。その夜は予測が外れて、殆どそれらしきものを見ずじまいだった悔しさから、今度こそはと大いに期待を膨らませていた。予報では、夜明け前の4時頃、南東方面のしし座を焦点にして拡がるように降り注ぐ大流星雨になる可能性が極めて高いと報じられていた。我が家では、娘夫婦も目覚ましまでセットして用意万端の態勢で待ち構えていた。ところがである。出現の最盛期と予告されていた午前4時を過ぎても一向にそれらしきものが現れず、今回も肩すかしを食ってしまったのである。大規模な流星雨の場合は、大玉の打ち上げ花火のような華麗さがあるというが、そうでなくてもせめて「線香花火」の燃え尽きる前の、「猫のひげ」と子供の頃に呼んでいたくらいのものを期待していたのである。またしても、「秋の夜の夢」に終わってしまったと思うと、腹立たしさも加わって寒さと眠たさがどっと襲ってきた。

数年前に打ち上げられたハッブル宇宙望遠鏡は、数十億光年先までであったそれまでの観測可能範囲を、一挙に120億光年先までに広げた。未だ見たこともない宇宙誕生という壮大なドラマの舞台を垣間見ることさえできるようになった。更に今年、我が国の「すばる」望遠鏡がハワイに完成し、その世界最大の8.2メートルの反射望遠鏡が開拓する宇宙の果てはどんなものだろうか、世界中の目が集まっているらしい。今でも限りなく膨張し続けているという宇宙の謎は、興味津々ではあっても、とてもわたしの理解の範囲ではないが、こと月やお隣の火星の話となると、にわかにも実感を持った星といった親しみが湧いてくる。惑星への発進基地ともなる国際宇宙ステーションの建設も始まり、日本人の宇宙飛行士も活躍するこの頃では、空の星はもはや専門家だけの問題ではなく、茶の間話題にも上るようになった。恐らく、21世紀の早い時期に、人類が火星の土を踏むことは間違いなさそうである。

火星といえば、わたしの子供の頃は、運河と火星人のことが話題であった。アメリカのローウェルが私財を注ぎ込んだ天文台で詳細に火星を観察し、運河のような構造のあることを確かめたことが、一躍、知能の発達した生物存在の夢をかき立てた。最近でこそ、SF映画の中に出てくる異星人は、時には人間と同じ人相風体をしているものもあるが、以前は頭でっかちの蛸のような形に表現されていて、なぜか人間より進化した生物というイメージがあった。60年ほど前、アメリカのラジオドラマで、宇宙人襲来の警報を流したところ、それを聞いた人々が大パニックに陥ったという逸話は、話半分にしたとしても、作

者の演出力もさることながら、世相不安な当時の世界状況を反映したものとして興味深い。その火星人も過去のものとなった。数年前、それまで長い間、世界の探検家や古生物学者の間のみならず、世の中の人々が持ち続けた「ネッシー」の夢が、一人のイギリスの老人の告白により、一瞬にして消え去ったことは、知る人ぞ知る事件であった。スコットランド北部のネス湖を泳ぐ恐竜のあの有名な証拠写真は、彼の作った模型潜水艦だったのである。人々はあまりに無惨な夢の結末にたたきつぶしたものであった。それほど現代人は夢に飢えているのである。即物的風潮の強い今の社会人の心を、火星人やネッシーは長い間楽しませてくれていたというべきなのだろう。

SF映画でわたしの印象に残るものといえば「宇宙戦争」や「スターウォーズ」、「未知との遭遇」や「E.T.」などがある。宇宙人は我々の敵であったり友人であったりして、我々の彼らに対する思い入れは、随分身勝手なものがある。最近では、世紀末という時代背景もあってか、人類滅亡にも係わる巨大隕石落下など、インパクトを売り物にしたものも現れた。ところが、そのシナリオは、宇宙観測システムの進化した今日、決して絵空事ではないことが分かってきた。火星と木星の軌道の間、数万もの大小さまざまな小惑星の存在することは古く300年以上前から知られていた。近頃、にわかになんかそれが注目を集めたのは、カリフォルニア大学のアルバレス教授が、6500万年前の恐竜大絶滅は、小惑星の衝突によるという説を出してからである。大衝突の現場がメキシコ・ユカタン半島付近らしい証拠も最近になって見つかった。推測される小惑星の大きさは直径約10キロメートルと見られ、広島型原爆数百万発に相当するという衝撃は地球の環境を激変させるに十分であった。さすがの地球の支配者恐竜も、生き延びる術もなかったに違いない。アリゾナや西オーストラリアなどに残されている巨大隕石の衝突痕は、五百万年以上も前のものもあるらしく、いずれにしても、人類の歴史よりは遙か以前か辺境の地であったのは幸いという他はない。ところが今世紀はじめ、シベリアツングース地方を襲った隕石の衝突は、原爆数万発の規模であったらしく、1000キロメートル四方にも及んだ森林の惨状は、20数年後まで残っていた程であったという。

天文雑誌を開くと、隕石のもとである小惑星の新顔が次々に発見され、各国の天文学者は追跡するいとまがないというから驚く。中には地球に接近するものがあるので厄介である。3年前の5月には、直径数百メートルのもの(広島型原爆20~30万発相当)が、月と同じくらいの所を通過したというし、来年9月には月と地球の間という近距離を通ると見込まれる直径1キロメートルほどの巨大小惑星が注目されている。これらは少しでも軌道がふれると地球に激突

し、人類も、恐竜と同じ運命を辿ると予想される。それぞれの小惑星の軌道は精密に計算され衝突の心配はないというが、二度も流星雨の予想に裏切られたわたしには、そう簡単には信じられないというのが本音である。アメリカ航空宇宙局(NASA)は、探査機を飛ばして、接近の危険のある小惑星の素性を調べる計画を実行に移しているが、緊急の時は、核爆弾で軌道をそらす対策さえ考えているという。皮肉にも核爆弾は今や、人類の将来を保障する極め手の道具に変身したわけである。これこそ原子爆弾の平和利用というべきか。

SF小説の中だけと思われていた宇宙戦争の世界は、小惑星との「戦争」に置き換えれば、にわかには現実味が増してくる。タールと燃えさかる硫黄が火柱となって突然天から降ってきて、退廃の町ソドムの総てを一瞬にして焼き尽くし去ったという旧約聖書の物語も、決して神話の中だけのものではないのである。その時、戦うか、逃げ出すか、人類存亡を賭けた決断の時である。逃げ出すとすると、ノアの箱舟ならぬ宇宙船に乗るのは誰なのか。目指すは月か火星の大地か、その地で、地球の大擾乱の収まるのを待つしかない。既に我々人類は、宇宙船の中で年余に渡る長期間の生活の実績をもっている。月や火星の気象条件であれば、そこに生活するためのプラントを作ることは不可能ではない。数年前から、アリゾナの砂漠では、外界から隔離された大規模空間(名称：バイオスクエアⅡ)の中で、7人の科学者が数年に渡る自給自足の生活実験を始めている。こんなプラントが月面に建てられて人が生活を営むことは、もはや夢物語ではないのである。

宇宙といえば常に話題になるのは、どこかに地球外生命体(E.T.)が存在するのではないかという夢である。ある試算によれば、生命を宿す星の存在の確率は1兆分の1ほどであるともいう。しかし、その微々たる確率にもめげず、四六時中、銀河系の彼方からの通信に耳をすませている国際研究グループがあるのは、わたしのSF欲を刺激して限りなく楽しい。カリブ海に浮かぶプエルトリコのアルシボ天文台がそれに挑戦する拠点である。そこの直径305メートルの巨大電波望遠鏡にメッセージを送ってくるのはどんな「E.T.」なのだろうか。どこかの銀河の星に、孤独な地球人類の友人がいると考えるなど、これこそ21世紀の人類の夢である。星の瞬く夜空を見上げながら、そんなことを考えてみるのも、乱世の今日だからこそ必要かもしれない。しかし、ただ腕を拱いて待つのはわたしの性に合わない。もしも、「銀河鉄道」の切符が手に入るなら、ジョバンニと一緒に乗せてもらって、E.T.捜しに行きたいものである。

(名古屋大学名誉教授)